

倫理

第1 高等学校教科担当教員の意見・評価

1 前文

公民科の受験者総数（追・再試験を含む。）は305,739人であり、その内訳は、「現代社会」が最多の169,752人（55.5%）、「政治・経済」が82,845人（27.1%）、「倫理」は53,134人（17.4%）であった。公民科の総受験者数が減少する中、「倫理」については、1,976人の微増となった。

青年期という多感な時期に、先哲の思想に触れ自己の在り方生き方について考えることは、よき人生を支える糧として必要不可欠で貴重な経験である。近年、稚拙で短絡的な問題行動を引き起こす青少年が多く見られる。これは、青少年の全人的な成長にかげりが生じつつあることを意味しており、高等学校において「倫理」を学習することの意義をあらためて強調したい。また、学校現場においては、学力格差が問題となっており、さらに、学力の高低にかかわらず生徒の自主性、主体性が薄れているように感じられる。加えて、思考力、判断力を伴う課題に取り組むことを嫌がり、自分の主張を持ち表現することができない生徒が増えている。これらの意味において、今回の「倫理」受験者数が前年度に比べ増加を示したことは好ましい傾向と考える。

以上のことを踏まえて、本年度の試験問題について次の視点から検討及び評価を行った。

- (1) 高等学校学習指導要領の目標及び内容に適合しているか。また、それに準拠した教科書や授業内容に即した問題であるか。
- (2) リード文は、メッセージ性を持ったもので、「倫理」を学んだ受験者を啓発するものであるか。
- (3) 基礎的・基本的なものから総合的な思考力、判断力、応用力を問うものまでバランス良く出題されているか。
- (4) 問題の難易度、出題方法、配点等が適切であり、各分野からバランス良く出題されているか。

2 試験問題の内容・範囲等について

試験問題の内容及び出題範囲については、高等学校学習指導要領において示された二つの大項目「青年期の課題と人間としての在り方生き方」及び「現代と倫理」の分野から、適切に出題されていると考えられる。以下に大問及び設問ごとの範囲や内容、程度等に関する分析を示す。

第1問 「人生と悩み」について（青年期の課題）

青年期の特徴としての「悩み」を取り上げ、青年期だけではなく、人生を通して常に自分と向き合うことで、人間が成長していくとするメッセージが表現されている。用語や人名などの基本的な知識を問うのではなく、考えることに重点を置く設問になるよう工夫されているが、全体的に易しい問題である。

問1 「年齢層別に見た悩みや不安の内容」を示した資料を読み取る設問である。「倫理」の知識がなくても選択肢とグラフを照らし合わせて容易に解答できる。ただし「年齢層」「男女」「不安の内容」と複数の要素を検証するという点で思考力や判断力が問われる設問である。

問2 自我同一性を見失っている心理状態、すなわちアイデンティティの拡散を具体的事例から判断させる工夫された設問である。概念の正確な理解が求められるが、誤答がはっきりしすぎており、易しい設問になってしまっている。

問3 エリクソンのライフサイクルのうち青年期以降の4段階について、各段階とその特徴の組合せを問う設問である。易しい設問であるが総合的な判断力を求めている良問である。

第2問 「復讐^{ふくしゅう}心の克服」について（源流思想）

人間の感情を取り上げ「復讐心」に視点を置き、先哲の思想から憎悪^{えんこん}や怨恨を乗り越える方法を模索することが必要であるというリード文である。現代社会の問題点を想起させる内容であるが、偏った思想に結び付く危険性もあり、リード文の意図するところが受験者に伝わりにくかったかもしれない。各設問は全体的に教科書の基本的な内容を問う設問であり、取り組みやすく標準的な難易度の問題である。

問1 「ただ生きるのではなく、よく生きることだ」という言葉で知られるギリシャの思想家であるから[4]はソクラテスを選択することは容易である。[5]は、孔子の唱える「他者に対する思いやり」に該当する「恕」と「他者を愛する」という意味の「仁」とで迷った受験者も多かったと思われる。正確な知識が問われるやや難しい設問である。

問2 エピクロス派の生活信条の概念を問う設問である。「アタラクシア」というキーワードで選択でき、他の選択肢も基本的な知識で確認することができるので易しい設問である。

問3 アリストテレスの調整的正義の概念を問う設問である。思考力や判断力を試す部分もあり、多少迷う受験者も多かったと思われる。正確な知識が求められており標準的な難易度の設問である。

問4 新約聖書の「ローマ人への手紙」を資料として「復習するは我にあり」の意味を問う設問である。資料のみでは判断することが難しく、新約聖書で示される思想の全体的な把握が必要でありやや難問であると言える。

問5 イスラームについての基本的な内容を問う設問である。やや判断に迷うような言葉が含まれているが、正確な知識があれば容易に解答できる標準的な難易度の設問である。

問6 ブッダの教えを問う設問である。「無情・無我」「執着」などの語句から正解を選ぶことが可能であり、また、他の選択肢の誤りが明確であるため易しい設問である。

問7 老子が説く「争いを避ける生き方」についての意味を問う設問である。「水のような生き方」と結び付けることがやや難しく、他の中国思想の概念と明確に区別できることが求められる。標準的な難易度の設問である。

問8 リード文全体の内容把握が求められる設問である。思考力や判断力を問うような工夫が見られ、よく練られた良問であるが、他の選択肢の誤りが明確であるため易しい設問になってしまっている。

第3問 「日本思想における他界観」について（日本の思想）

人間の死にかかわる日本人のイメージは、日本古来の思想と仏教思想などの外来思想とが混在し、日常の行事についても本来とは異なるとらえ方をしている人が少なくない。また、「他界」についても様々なとらえ方があり、受験者に広い視野から考えさせるリード文である。全体的に標準的な難易度の問題である。

- 問1 [13]は日本の神話的の死生観を問う設問であるが、選択肢がいずれも基本的な語句であるため易しい設問である。[14]はすぐ後のリード文に「上下定分の理」というキーワードがあり、容易に解答できる設問である。
- 問2 折口信夫の「まれびと」論の概念を資料から問う設問である。分かりやすい資料なので、易しい設問である。
- 問3 平安時代の浄土思想について、「観想念仏」を問う設問である。他の選択肢が鎌倉仏教の宗派の特徴を明確に示しているため、解答は容易である。
- 問4 荻生徂徠の古文辞学の思想を問う設問である。古文辞学と他の学問との正確な区別が問われる標準的な設問である。
- 問5 神仏習合についての概念を問う設問である。標準的な難易度であるが、明治以降の政策についての理解が求められており、やや判断に迷った受験者もいると思われる。
- 問6 古典落語を資料として、日本人の他界観を問うユニークな設問である。仏教思想の細かな知識が求められるが標準的な難易度の設問である。
- 問7 幸徳秋水の思想について問う設問である。他の選択肢の誤りが明確であり、標準的な難易度の設問である。
- 問8 リード文の内容把握とともに思考力を問う設問である。リード文の内容が理解できなければ解答できず、選択肢も工夫されているが、内容が極端なものもあり容易に解答できる設問である。
- 第4問 「現代における理性の意義」について（西洋近現代思想）
- 西洋思想の中で中心的な役割を果たしてきた「理性」について取り上げたリード文である。それぞれの時代において思想家が考えてきた「理性」の概念の違いが分かるように工夫されている。教科書や授業では結び付けにくかった各思想家の考えが、本問を通して理解できた受験者も多いだろう。各設問は全体的に標準的な難易度であると言える。
- 問1 [22]はカントとヘーゲルについての全体的な理解が必要なため受験者はやや迷っただろうが、リード文からも正答を判断でき、比較的容易な設問である。[23]はその前後からヤスパースと容易に判断できる。なお、選択肢の正答と誤答の関連性をつけてほしい。
- 問2 4人のフランス啓蒙思想家の思想の正誤を判断する設問である。ヴォルテールがロックの思想に学んだかどうかで迷った受験者も多く、やや難しい設問である。
- 問3 デカルトの「精神」についての概念を問う設問である。基本的な概念の理解ができていれば判断できる易しい設問である。
- 問4 ベンサム功利主義についての概念を問う設問である。キーワードでは判断しにくい、「最大多数の最大幸福」の概念の理解から判断できる易しい設問である。
- 問5 キルケゴールの実存主義についての概念を問う設問である。実存主義思想全体の理解ができていれば解答できる、標準的な難易度の設問である。
- 問6 パースの思想について、資料から概念を答えさせる設問である。資料の中の「信念」「行動」などの語句の関係を読み取ることで判断できる、標準的な難易度の設問である。
- 問7 フーコーの思想の概念を問う設問である。現代思想全体の正確な理解が必要であるが、「狂気」というキーワードから判断できる、標準的な難易度の設問である。

問8 リード文の内容把握をもとに思考力を問う工夫された設問であり、標準的な難易度の問題である。選択肢の誤答はそれぞれの表現が極端であり、また正答の「対話」はリード文から考えて必ずしも適切とは言い難いので、選択肢に工夫が欲しい。

第5問 「ケアの倫理」について（現代の諸課題と倫理）

「正しい行為の原理」と「ケアの倫理」という視点から、現代の諸課題についての思考力や知識を問う設問である。現代倫理の分野から様々な内容や新しい考え方をリード文や設問に盛り込むなど、「倫理」独自の工夫が見られる。受験者に幅広い学習と資料を読んで分析する応用力を求めるといふ出題者の意図が伝わってくる。全体に標準的な難易度の問題である。

問1 ハーバーマスの「対話的理性」の概念を問う設問である。ハーバーマスについて基本的な理解ができていれば判断できる、標準的な難易度の設問である。

問2 第二次世界大戦後の非人道的な行為を防ぐための取組に関する設問である。他の公民科の科目の学習と正確な知識が必要とされ、難問である。

問3 人間が尊重されるための国際的な取組について問う設問である。問2と同様、「倫理」の教科書の範疇^{ほんちゆう}を超える内容であり、正確な知識が要求されるやや難解な設問である。

問4 世界保健機関（WHO）の緩和ケアについての定義に関する設問である。定義と図を踏まえて思考力を試すなど受験者の倫理的な感覚を問う良問で、標準的な難易度の問題である。「倫理」の知識がなくても判断できるが、思考力や判断力を試すためには正答を選択させる方がよかったかもしれない。なお、選択肢の文頭を「緩和ケアという考え方は」にそろえた方が読みやすい。

問5 キャロル・キリガンの「ケアの倫理」についての概念を問う設問である。教科書では扱われず、初見の受験者も多かったと思われるが、資料の内容を理解できれば容易に解答できる。論理的な思考力や判断力が要求される「倫理」らしい良問である。

問6 現在の日本社会における家族のあり方に関する設問である。基本的な知識と判断力があれば容易に解答できる設問である。

問7 リード文の趣旨を踏まえて、最後にあてはまる文を選択させる設問である。リード文の内容の把握が必要であり、選択肢にも工夫が見られる。標準的な難易度の良問である。

3 試験問題の分量・程度等について

問題数については、大問数は5、設問数は34、解答数は37であった。いずれも前年と同じでほぼ例年どおりであった。後に示した分類表からも明らかなように、問題数、配点とも、「概念などの理解を問うもの」が半分以上を占めており、また「応用力を問うもの」については前年よりも増えた。

問題の形式は、リード文の空欄にあてはまる語句や文を選択するもの、下線部及びリード文の趣旨に関する設問であり、おおむね適切なものであった。設問ごとの選択肢はすべて3行以内にまとめられ、リード文も含め試験時間内で十分に読み考えることのできる適切な分量と内容であると評価する。

それぞれの大問は、多くの教科書で採られている章立て順での出題であり、全般的に幅広い学習を求め、基礎的・基本的な設問を中心とした適切な出題であった。昨年に比べて受験者になじみの

ない資料や語句から思考させる設問が増え、知識量に加え深い思考や判断を求めるような工夫がされていた。今後も引き続き、学習の成果を試すことができる資料の活用を検討していただきたい。

4 試験問題の表現・形式等について

試験問題の形式や配点については、以下の表に示したとおりである。昨年に比べ用語や人名等の知識を問うものが減り、思考力、判断力、応用力を問うものが増えたが、全体的にバランスがとれており、各設問についても受験者が十分に理解できる適切な表現であった。

	主に基礎的・基本的な用語や人名等についての知識を問うもの	主に基礎的・基本的な概念などについての理解を問うもの	主に総合的な思考力、判断力、応用力を問うもの	
本 試 験	第2問 問1 (4点)	第1問 問2 (2点)	第1問 問1 (3点) 問3 (3点)	
	第3問 問1 (4点)	第2問 問2 (3点) 問3 (2点) 問5 (3点) 問6 (3点) 問7 (3点)	第2問 問4 (3点) 問8 (3点)	
	第4問 問1 (4点)	第3問 問3 (3点) 問4 (3点) 問5 (3点) 問7 (3点)	第3問 問2 (3点) 問6 (3点) 問8 (3点)	
		第4問 問2 (2点) 問3 (3点) 問4 (3点) 問5 (3点) 問7 (2点)	第4問 問6 (3点) 問8 (3点)	
		第5問 問1 (3点) 問2 (2点) 問3 (3点) 問6 (3点)	第5問 問4 (3点) 問5 (3点) 問7 (3点)	
	計	第1問～第5問 12点	第1問～第5問 52点	第1問～第5問 36点

5 要 約（総括的な評価）

リード文及びすべての設問について逐一検討してきた。個々の設問に対する評価は前述のとおりであるが、出題方法、配点については、全体的にバランスよく出題されているが、難易度は全体としてやや易しい傾向が見られた。

各リード文及び資料文は、例年同様に倫理的示唆に富む意義深い内容となっており、「倫理」を

学んできた受験者を大いに啓発するものであり高く評価できる。設問についても、先哲の思想を現代に生きる人間の倫理的な課題とのかかわりの中で、思想の内容を受験者の日常に置き換えて考えさせたり、基本的知識や概念の理解を問うものや思考力、判断力を問うもの、応用的思考力を試すための資料読解問題が増加し、狂言や古典落語などからの引用などのユニークな出題もあり、全体的によく工夫されていた。

高等学校学習指導要領との関連においても、バランス良く出題されており適切であった。その中で高等学校学習指導要領の内容「(2)ウ 現代の諸課題と倫理」にかかわる第5問については、大問としてのまとまりが出てきた。この項目の内容については、同じ公民科の「現代社会」や「政治・経済」との共通性が強い分野であるが、「倫理」の科目的特性を考慮し、可能であれば青年期や日本思想、西洋思想とのかかわりの中での出題を今後も検討していただきたい。また、内容「(1)ア 青年期の課題と自己形成」にかかわる第1問については、例年設問が3題しかないが、教科書での取り上げ方から考え設問数を多くすることや、大問として独立させず他の項目との関連での出題とするなど検討していただきたい。

教科書との関連においては、一部で内容を超えるような設問が見受けられたが、受験者にとってなじみのない資料や語句であっても、思考や判断を通して解答させる工夫や意図が感じられ、高く評価できる。一方で受験者に深い思考を促すところまで至らない設問もあり、また特に第5問では、概念の理解も含め解答が知識量に左右される割合が強い傾向も見られ、大問の設定方法も含め今後も検討をお願いしたい。

総じて言えば、本年度の「倫理」の出題は、高等学校学習指導要領の内容に適合しており、基本的な知識に基づく理解や応用力についてバランス良く問われており妥当なものであった。大学入試センター試験は単に学力評価だけではなく、高等学校での「倫理」の指導のあり方を方向づける重要な役割も担っている。このようなことを考慮していただき、今後も「倫理」の目標である、「良識ある公民として必要な能力と態度の育成」に資するような問題作成に取り組んでいただきたい。